英語教育における「音声学」

新井　良夫

はじめに

21世紀の現在では、英語教育は今や「国際語としての英語（EIL: English as an International Language)」を教える、という考え方になってきている。必ずしも母語話者の英語（ENL: English as a Native Language）を到達目標にするのではなく、世界中の様々なタイプの英語（ESL: English as a Second Language あるいは EFL: English as a Foreign Language）とのコミュニケーションが可能な英語を目標にする、ということである。そしてコミュニケーション能力の育成が英語教育の目標であり、文部科学省は「英語が使える日本人」構想を出した。そして指導方法にも変化が見られるようになってきて、その一例は高等学校の英語は基本的に「英語を英語で教える」ことになった。

歴史を振り返ってみると、世界で英語が学ばれ始めたのは20世紀の始めである。それまでのフランス語に代わって英語が学ぶべき外国語として認識され始めたのである。日本に於いてもパーマー（Harold E. Palmer）が日本にきてオーラルメソッドを広めて以来、オーラルが重視されるようになった。音声指導が本格的に行われ始めたのである。音声機器が教室で使われるずっと以前のことである。教室でテープレコーダーが使われるようになったのは20世紀の後半になってからのことである。そしてこれからは英語の授業は日本人教師も英語で行うようになってきている。

パーマーのオーラルメソッドに関しては最近もその再考察が行われている。（高井　2011 & 2012）それでは英語教育での音声に関係する指導は大きく変化してきただろうか。またこれから先変化していくだろうか。そもそもパーマー自身はロンドン大学 University College

（UCL）で Daniel Jones と共に音声学や英語教育を教えていたのである。音声学の発展のはじめは実は英語教育の改革に源があった、と言える。それでは UCL では英語教育での音声学の係わり方はどのように考えられていたのだろうか。そこでこの小論では、University College（UCL）で音声学研究をした Daniel Jones の音声学と語学教育の考え方を考察してみたい。また、Jonesから音声学を学び、共に音声学を研究した David Abercrombie の "Teaching Pronunciation" の論文も考察してみる。

なお、Daniel Jones の業績や生涯に関しては、Beverley Collins & Inger M. Mees がその著書 *The Real Professor Higgins : the life and career of Daniel Jones*（1999）で膨大な資料をもとにきわめて詳細に解説している。本稿の Daniel Jones の記述に関しては主にこの著書を参考にしつつ考察を進めた。

1. Daniel Jones

Daniel Jones（1881-1967）はロンドンで生まれ、パブリックスクールからケンブリッジ大学に進み数学、法律を学んだ。弁護士であった父親と同じルートを経たのであるが、弁護士を目指そうとするものの興味を得られず、フランス語をはじめとして外国語に強い関心を持った。フランス語やイタリア語、ドイツ語などの習得から次第に言語研究に進み、結果的にパリで音声学者 Paul Passy の元で音声学を学んだ。その後、University College London で職を得て以後、名実ともに音声学界の代表的な研究者となった。

Jones の数多い功績の中で常にあげられることの一つに、イギリスで最初の音声学科をロンドン大学 University College（UCL）に開設したことである。またもう一つの大きな功績は、the International Phonetic Association（国際音声学協会）の組織を拡大したことである。その活動の大きな所産が the International Phonetic Alphabet（国際音声記号）の確立であり、現在一般に広く使われている発音記号を制定したのは

Jones の大きな功績である。

1. 1. The UCL Summer School in English Phonetics

1907年から UCL で教え始めた若き Daniel Jones は、1908年２月からの２学期にはすでに ‘English Phonetics for Foreign Students’ のクラスを担当している。ちなみに1912-13年のクラスには、日本、中国を含む11ヶ国から学生が集まっていた。さらに1915年からは夏休みのコースも開設した。イギリスや外国の英語教師や学生のために、The UCL Summer School in English Phonetics として開設し、このコースは100年後の現在も存続している。

このコースが貢献したのは、言語学者や言語学の学生以外のイギリスや外国の特にヨーロッパの語学教師、あるいは外国人学生などに、音声学や言語学を身近なものとしたことである。新しい世紀20世紀の音声学、言語学の概要を広く紹介する機能を果たしたのである。そしてこのコースが現在でも人気を得ているのは、Jones が用いた Applied Phonetic Method of Pronunciation Instruction といわれる教授法にある。

Applied Phonetic Method of Pronunciation Instruction は当時の語学教育の主流であった、伝統的な翻訳アプローチの教授法と大きく異なったものであった。この教授法は、話しことば中心の、しかも発音訓練（ear-training）に大きな重点を置いたものであった。さらに音声学そのものの講義も多く取り入れたものであった。

1921年のこのコースを受講したあるオランダ人は、直後に自国の雑誌に以下のように報告している。Jones のスタッフの一人である Lilias Armstrong の ear-training classes の一端である。

> She wrote the vowels on the blackboard in phonetic transcription and then pronounced them clearly several times, so that people learnt to make a good distinction between the

sounds. Then she produced the vowels and consonants in 'unusual combinations' which were totally without meaning, so that although they were composed of English sounds, no connection could be attached to the written image in one's mind…. If one had written down the combination incorrectly, then she pronounced it with the sound the pupil thought he had heard, in order to make him recognize clearly his mistake.

(Collins & Mees 1999: p.288)

さらにこの受講者は、もう一人の講師であるIda Wardのpractical classesに関して"very entertaining, instructive and … useful"と報告している。

1. 2. 'Indispensable source-books for every English language teacher'

Jonesの代表的著作として扱われる、*The Pronunciation of English*、*English Pronouncing Dictionary*、*An Outline of English Phonetics*の3冊は英語教師にとって欠くことのできない教科書でもある。

1. 2. 1. *The Pronunciation of English*

1909年に出版された*The Pronunciation of English*はJonesの著作のほぼ最初のものと言える。この初版本は69ページの小さな本にもかかわらず、英語音声を簡潔に入門的に記述したものであり、英語教師や英語学生にとってこのようなわかりやすい本は初めてのものであった。以後1950年に大幅に改訂した第3版を出版し、さらに1956年に最終となる第4版を出版したが、Jones自身、第4版のPrefaceで次のように述べている。

"That (3rd) edition differed in numerous respects from the original edition of 1909 and its reprints. However, the work

remained, as originally planned, an account of the phonetics of English presented from the point of view of the English learner, though it was much altered in details and was considerably enlarged." (Jones 1956: p. v)

音声学を専門としない読者にとって、理解しやすく学ぶことが多い本であったのは、このように学習者目線で書かれていたからである。

1. 2. 2. *English Pronouncing Dictionary*

English Pronouncing Dictionary は1917年に出版され、1963年までに第12版を出版した。そして後継者の一人である A. C. Gimson が補足修正して1967年に第13版を出して現在も出版を続けている発音辞典である。この辞典はイギリス英語の発音を網羅した初めての辞典であり、20世紀初頭からの 'educated British English pronunciation' を記録し続けてきた辞典でもある。しかも第12版までは Daniel Jones が一人で取り組んできた辞典である。

この *English Pronouncing Dictionary* が貢献したもう一つの分野は、「外国語としての英語教育（EFL)」である。20世紀になって、それまでのフランス語に代わって英語が学ぶべき外国語として、多くの国々で考えられるようになってきた。Jones は常に EFL の教育を念頭に考えていたので、語学教育におけるこの発音辞典の利用法に関してもその INTRODUCTION で次のように述べている。

"13. If he is a teacher of English, it is desirable that he should be familiar with the main features of other types of English speech besides his own.

14. Many foreign learners will no doubt consider one form of RP to be a suitable pronunciation for them to acquire, for the

practical reasons that it is widely understood in the English-speaking world and that books dealing with it are easily accessible.”（ Jones 1967: p. xix ）

English Pronouncing Dictionary は、実は1914年に Daniel Jones がドイツ人との共著でドイツで出版した、*the Phonetic dictionary* を元にして書かれたと言われている。その本は主にヨーロッパの英語教師や英語学習者を対象にしたものであった。したがって *English Pronouncing Dictionary* は当然英語教師や英語学習者が参考にすることを念頭に書かれたのである。（Collins & Mees 1999: pp.418-419）

1. 2. 3. ***An Outline of English Phonetics***

Jones の代表的著作として扱われている 3 つの本の中で、外国語としての英語教育（EFL）において最も貢献しているのは、*An Outline of English Phonetics* といわれている。

An Outline of English Phonetics は1918年に初版が出版された。1960年までに Jones 自身が 9 回も改訂して出版されており、勿論現在でも出版され続けている。*The Pronunciation of English* の出版から 9 年後に書かれていることもあり、*The Pronunciation* から更に詳細で研究の進んだ内容になっている。一言語の音声の全容を詳細に記述した音声学書として、*The Pronunciation* をしのぐものとしてみなされ、以後多くの研究者が最も引用する本となった。

An Outline もまたもちろん英語教育を前提として書かれているものである。初版本の PREFACE は OBJECT OF THE BOOK の項から始められており、そこには以下のように書かれてある。

“It is now generally recognized that no adult foreigner is likely to acquire a really good pronunciation of the English

language unless he makes a scientific study of the English speech-sounds and their distribution in connected speech. The present book has been prepared with a view to giving the foreigner all the information of this nature that he is likely to require for learning "educated Southern English" as described in § 24.

The greater part of the book is devoted to a discussion of the mistakes which are commonly made by foreigners in the pronunciation of English, and methods are indicated for correcting these errors. These methods are all based on personal experience; many of them are of my own devising, and none have been included without personal knowledge of their utility in practical teaching." (Jones 1922: p.III)

このような姿勢を貫いた Daniel Jones について、Collins & Mees は、Jones のすぐ後の後継者である Dennis Fry が Jones への追悼のことばとして書いた文章の一部（*English Language Teaching* 22. 1968 :198-199）を次のように紹介している。

It is safe to say that no single individual has ever had such a profound influence upon methods of language learning as Daniel Jones. Unlike many of his contemporaries in early days, he believed that it was not enough to be able to read a foreign language and that it was of tremendous importance how one spoke it. It was this conviction that led him to develop methods of teaching based on phonetic study which eventually revolutionized the learning of languages and particularly the study of pronunciation and intonation. (Collins & Mees 1999: p.419)

1. 3. 語学教育の実践者としての音声学者

上に述べたUCLでの活動や3つの著作だけからでも、Daniel Jonesは「語学教育の実践者としての音声学者」という側面がはっきりと見てとれる。

UCLでの音声学の講義は、それがフランス語音声学あるいは英語音声学であっても、フランス語教師、英語教師またそれを目指す学生たちを対象としたものであった。本格的な語学教育としての応用言語学研究は、20世紀になってUCLではこのように始められたのである。

UCLでの教育と並行してJonesは、上に述べた3つの著作活動も行った。英語教育とその研究に携わる人々にとっては、これら3つの著作はほぼ初めてとなる本格的な専門書であると同時に、英語教育を実践するための強力な指導書、参考書ともなるような書物であった。そしてこれら3冊にすべて共通しているのは、英語教師、学生、英語学習者にとって理解しやすい手法で書かれていることである。

UCLの授業で用いたApplied Phonetic Method of Pronunciation Instructionは、現在の語学教育ではごく当然に導入されているオーラル中心の語学教育の元になったと言えるものである。語学教育で使用する音声機器はまだ存在していない時代の教授法であるから、当時そのままの方法で現在の語学教育に導入する必要はないと言える。しかしこのApplied Phonetic Method of Pronunciation Instructionは、パーマーのオーラルメソッドと考え方が同じという意味で、結果的には日本の英語教育でも大きな恩恵を受けていると言える。また一方、このApplied Phonetic Methodの中心であるear-trainingは教室での発音指導の参考になるという点で、研究や実践が可能であるはずで現代の語学教育にも影響を与えるものであると言える。

2. Ear-training techniques と the British School of phonetics

2. 1. The practical side of phonetics

Daniel Jones の University College London（UCL）での教授法は Applied Phonetic Method of Pronunciation Instruction であると上に述べたが、その中心は ear-training であった。

この ear-training techniques は、「イギリス音声学派（the British School of phonetics)」といわれる少なくともイギリス音声学界の伝統となって現在に引き継がれているのである。

Jones は外国語研究と言語研究を始めた当初から、音声識別と音声実技（phonetic performance）に強い信念を抱いていたのである。音声機器が普及していない時代であるから、音声を正確に聴き取り、また教師自らの調音で正確に音声を再現する必要性は非常に重要であったと言える。音声学の研究では当然のことであり、語学教育の現場でも重要である、という考えであった。

Jones の practical side を重視するこのような考え方は、音声学の指導を最初に受けた Paul Passy の影響を受けていると思われる。また、Henry Sweet からの多大な影響も当然ある。

A. C. Gimson は Jones のこの考え方に関して次のように記している。

> D. J.［Daniel Jones］had no time for those linguists（or lingusticians as he preferred to call them）who described the phonetic structure of languages yet were incapable of hearing with accuracy or of reproducing the sound of the language in question to the full satisfaction of a native speaker.（Collins & Mees 1999: pp.422-423）

Jones 自身の、音声を正確に聴き取る「耳の良さ」や正確に音声を再現する「発音のうまさ」に関しては、Jones から直接指導を受けたり仕事

を一緒にした人々が、コメントや思い出の記述を残している。Harold E. Palmer は次のように言っている。

> A Henry Sweet or a Daniel Jones, with ears sharpened by intensive practice to an acuity that is the object of our envy, is the ideal phonetician. (Palmer1930: p.38)

また、UCL の学生として Jones に学び、その後同僚にもなった David Abercrombie は Jones に初めて会った時の思い出を次のように書いている。

> Jones answered the door himself, let me in, and said "How do you do? Come in and sit down. Would you please say a voiced bilabial implosive?" At that time I was not aware that he did not have much in the way of small talk. Fortunately I was able to produce the required implosive, and he then said "Thank you. Now will you please say a close back unrounded vowel." As it happened I could do so, and did; and the rigorous performance examination went on for some time. He put no theoretical questions to me at all. (Abercrombie 1983: p.1)

Daniel Jones と David Abercrombie の 2 人から教えを受けた Peter Ladefoged は、イギリス音声学派（the British School of phonetics）の伝統となったこのような音声実技について次のように述べている。

> A major characteristic of this [British] school is the emphasis on the ability to produce sounds oneself as well as being able to hear small differences in speech sounds. Daniel Jones was

very good at this…. In the British tradition, one is trained to become a practical phonetician in this sense. (Collins & Mees 1999: p.423)

2. 2. Jones の音声学の考え方

以上見てきたように、Daniel Jones は音声学に対して実践的側面を最も重視した見方をしている。そして彼の功績はその実践的な価値を伴った事象に多くみられるのである。そのような功績が20世紀の音声学の世界的な発展の礎となったのである。

しかしながら Jones は理論面の功績がなかったのではない。このことに関して Dennis Fry は次のように述べている。

> His reputation as a scholar was built, however, not only on this basis of practical study, but also on his outstanding achievements in the field of theory—the development of the cardinal vowel system and of phonemic theory, and also upon research into the sound systems of a wide variety of languages and into the history of the pronunciation of English. (Collins & Mees 1999: p.426)

Jones は理論面を軽視したのではまったくなく、その理論がどの程度実践面に関係するかを重視したのである。理論的に確実に裏付けられた実践的分野を重視したと言えるのである。

3. David Abercrombie の "Teaching Pronunciation"

語学教育における音声学の考え方、取り扱い方を考察するために、David Abercrombie の "Teaching Pronunciation" の記述を確認してみたい。

Daniel Jones の元で音声学を学んだ David Abercrombie は、その後 University of Edinburgh の音声学教授として研究・指導をして生涯を全うした。Jones の教えを直接受けた一人であり、the British School of phonetics の発展に寄与した中心人物の一人である。

この論文 "Teaching Pronunciation" は、1948年から54年に *English Language Teaching* に掲載した論文を集めて、1956年に出版した *Problems and Principles* に収められている。(1963年にその第 2 版を *Problems and Principles in Language Study* として出版した。)

Abercrombie はこの論文で、語学教師にとって必要な音声学の知識と技術はどうあるべきか、そして音声指導での考慮すべき点を述べている。

3. 1. 音声学の知識と技術

まず最初に、語学教師は 'phonetician' であるべきなのか、と問いかけて、語学指導の中で発音に注目すること自体が phonetics であるので、語学教師はすでに phonetician なのである、と述べている。この論文では学問分野としての「音声学」は 'Phonetics' として大文字 P で表記して、語学教師はその 'Phonetics' をいかに活用すべきかが問題となるとしている。そして語学教師は、専門家である「音声学者 (phonetician)」ほどの専門知識を持つ必要はないが、「音声学」の理論と実践の 2 面に分けて必要な事柄を以下のように説明している。

> On the *theoretical* side he needs an understanding of how the vocal organs work, and of how spoken utterance may best be analysed and described for teaching purposes; and a knowledge of the phonetic structure of English and of his pupils' native language. On the *practical* side he needs an ear sufficiently trained to diagnose mistakes, and vocal organs sufficiently under control to produce isolated English sounds and

imitations of pupils' mispronunciations; and some acquaintance with those tricks of the phonetic trade which provide short cuts in correcting mistakes.（Abercrombie 1956: p.30）

次にその準備の方法として、理論面は音声学の教科書で間に合うとしている。実践面については次のように述べている。

The practical sensory training, it is true, can be obtained only from a phonetician（a few, exceptionally gifted, individuals may manage without), but I know from experience that it can be imparted in a comparatively short time.（Abercrombie 1956: p.30）

以上のような事柄は語学教師にとっては必要最低限の知識と技術であり、自分が実践しようとすることを把握しておくことは無駄ではないと述べている。また実践面の音声技術は、指導してくれる人がいれば誰にでも簡単に身につけることが出来るものであるとしている。

3. 2. 音声指導での考慮すべき点

次の４つの項目に分けて解説している。語学教育での「音声学」、発音記号の扱い、発音における個人差、発音指導の目的の４点である。

3. 2. 1. 語学教育での音声学

「音声学」は教師にとっての知識、技術であって、学習者に「教える科目」ではない。あくまで「発音指導」をすることなのである。さらに言えば、「発音」を教えるのではなく「英語」を教えるのである。したがって発音指導のためだけの語や文を提示して指導するのではなく、あくまで「ことばとしての英語」の指導の一端に発音指導が位置づけられるべきである。

3. 2. 2. 発音記号の扱い

発音記号としてIPA 記号がふさわしいこと、文字と発音記号の導入の仕方を４つあげて学習環境によって適、不適があること、などを述べている。ちなみに母語がローマ字でない学習者には発音記号は最初に導入しないほうが良い、と主張している。

この論文が1950年前後に書かれており、テープやCD あるいはDVD など音声の録音教材がある現在とは学習教育環境が著しく異なっている。したがってこの項の詳細は省略する。

3. 2. 3. 発音における個人差

学習者にはその人の言語能力や知的能力に関係なく、外国語の発音の上手な人とそうでない人がいる。耳が良くて発音の上手な学習者には発音指導に関しては楽である。しかしあまり上手でない学習者に対しては、発音指導は十分気をつけるべき点があり慎重に構えるべきである。

まず、発音器官を操作して舌の位置を変える、などの音声実技に心理的抵抗感を強く持つ学習者がいる。さらに、うまく発音「できない」のでなく、「しない」学習者も多くいる。外国語の正確な発音は「気恥ずかしい」という印象を持つことが学習者にはよくある。外国語をうまく発音すると周りの学習者から「白い目」で見られて耐えがたい気持ちになる。だから発音できるのに「しない」場合がある。

したがって、うまく発音できない学習者に集中的に指導たりすることなどは、心理的負担を必要以上に与えかねず、絶対に避けるべきである。

3. 2. 4. 発音指導の目的

この項では、発音指導での到達目標として妥当な考え方はどのようなものであるかを論じている。

「完璧な発音」（perfection）をその目標する考え方がある。実際には到達できないものの目標だけはそこに置くということもある。しかし、それ

は間違っており「完璧な発音」は必要でない、という観点で、‘a limited goal in pronunciation teaching’という考え方を提唱している。

> …intending teachers have to, of course, but most other language learners need no more than a comfortably intelligible pronunciation（and by ‘comfortably’ intelligible, I mean a pronunciation which can be understood with little or no conscious effort on the part of the listener).（Abercrombie 1956: p.37）

発音指導は、その必要性もなくかつ到達が現実的でない「完璧な発音」を目標にするのではなく、「ある程度の理解度が達成されている発音」を目標にすればよい、と主張している。そのためには、すべての母音、子音を練習してから次にイントネーションやリズムを練習する、というのでなく、学習者が習得すべき項目を厳選してそれを集中的に指導して、他の項目は概略的な指導にとどめる、ということである。

3. 3. ‘a limited goal in pronunciation teaching’

「完璧な発音」でなく「ある程度の理解度が達成されている発音」を目標にする前提として、学習者の年齢にまず言及している。年少の子どもの学習者は完璧な発音を身につけるのは簡単だが、思春期くらいの年齢以降の学習者にはsystematic（and painful）instruction が必要となる。そこで、「ある程度の理解度が達成されている発音」をめざすという限定目標を達成するための考え方として、以下の六つの点をあげている。

3. 3. 1. 指導項目の選択

まず、英語の音声構造として識別に必要な最低限の項目を決める。次に学習者の母語の音声構造から英語発音に必要な項目を選ぶ、としている。

英語として必要な例として、たとえば［ɔ:］と［oʊ］、［æ］と［ʌ］の区別をあげている。また、区別の必要がない例として clear “l” と dark “l” の違いをあげている。

3. 3. 2. 項目の指導順序

項目の選択と同様に重要なのが指導する順序である。すべての項目を同時に指導できないし、そもそも、発音指導とは一連の筋肉運動の「習慣」を植え付けることである。そのような習慣はひとたび習得すると忘れることはなく、以後出来るようになる。したがって、英語の発音として最も重要でかつ最も困難な項目から指導することが重要である。ある母音が最初で次にある子音そしてある母音、というような順序になってもいいのである。

3. 3. 3.「リズム」の重要性

「ある程度の理解度が達成されている発音」の項目として重要なのは、母音・子音の各音の発音だけでなく、英語のリズムである。例として、言語リズムが英語と同じドイツ語が母語の学習者には必要ないが、フランス語話者には重要項目である、と述べている。

3. 3. 4. 正確な音質より区別

学習者は母語の音を英語音として使うことが多いが、母語の音を使っても区別がはっきりとしていれば、たとえ英語の音質と異なっていても理解されうるものである。したがって英語の正確な音質よりもはっきりと区別することが重要である。

3. 3. 5. 発音の型と R.P.（Received Pronunciation）

Daniel Jones は、標準語の発音でないとは明言しつつも、Received Pronunciation を教えるのが良いとしている。しかしこれには問題点が多

いと Abercrombie は主張している。R.P. はイギリスの England では社会的には優位であるが、それ以外のイギリスや世界中の他の英語使用国では異なる型の発音である。英語教師の大多数は R.P. の発音ではない。また、「ある程度の理解度が達成されている発音」を目指すのであれば、外国人英語学習者にとって易しいとは言い切れない R.P. の発音を習得する必要はない、としている。

3. 3. 6. 効果的な指導法の確立

世界中で英語が教えられているが、発音の領域に関しては他の領域に比べて明らかに成功していない、と Abercrombie は指摘している。そこで、「ある程度の理解度が達成されている発音」を目指す考え方は、効果的な発音指導法の開拓に寄与するはずであるという。

3. 4. David Abercrombie の考え方

「語学教師はすでにphonetician」(3. 1.) という Abercrombie の見方は、「音声学」が語学教育とかけ離れた学問分野ではない、という根本的な考え方である。音声学は実践面があってこそ理論面をともなった学問分野である。これは、上述した Daniel Jones の考え方とまったく同じである。そして語学教師はその理論面と実践面の両方を持ち合わせるべきであるが、いわゆる「音声学者」ほどの専門家でなくてもよい、としている。また、発音指導の目的として、'a limited goal in pronunciation teaching'(「ある程度の理解度が達成されている発音」) を提唱している。

3. 4. 1. 語学教師にとっての必要最低限の知識と技術

語学教師は音声学の理論面と実践面の両方を持ち合わせるべきであると 3. 1. で述べているが、このことに関して日本での英語教師の観点から考察してみたい。

まず理論に関しては、発音器官の仕組み、話し言葉が音声指導のために

どのように分析されて説明されるかを理解して、英語と日本語の音声構造を把握する、ということである。日本人の英語教師は教員免許取得のために英語音声学を必修科目としてすでに学んでいる。したがって基本的な知識は獲得していると言える。ただ、「英語教育のための英語と日本語の音声学」という内容で学んだ人は必ずしも多くはないだろう。英語教育での音声説明は、ある程度の指導を受けたり長年の経験がないと、決して簡単なことではない。教師本人の英語体験からの独自の説明には、音声学的に間違ったことも含まれる危険がある。このことからも、英語と母語である日本語の英語教育に特化した音声学知識は必要である。

実践面については、発音の間違いを聞き取る訓練された「耳」と、英語音と生徒の間違った音を再現できる発音能力を持ち、間違いを修正する「指導のツボ」を知っていること、と述べている。

上の２.で言及したような ear-training techniques に重点を置いた音声学を学ばないと、このような実践面の技術を習得するのは簡単なことではない。現在の日本人英語教師は英語の運用面に関してはほとんど問題はないが、正確に発音できることがそのまま発音指導にすべて還元されると言い切れるわけではない。この点で ear-training の体験が役に立つと思われるのである。

Abercrombie が3. 1. で言っているように、このような実践的な技能は指導を受ける機会があれば簡単に獲得できるものである。教員養成プログラムに取り入れることが必要になると思われる。

3. 4. 2. ‘a limited goal in pronunciation teaching’

Abercrombie は、発音指導はその必要性もなくかつ到達が現実的でない「完璧な発音」を目標にするのではなく、「ある程度の理解度が達成されている発音」を目標にすればよいと上（3.2.4.）に述べている。また、Received Pronunciation などあるタイプの「完璧な発音」を目標にするのは間違っているとも述べており、世界中で英語が教えられているので、

「ある程度の理解度が達成されている発音」を目指すべきである、という考え方である。

この考え方は、現在では一般的な考え方として引き継がれ発展してきている。Jennifer Jenkins は 'the need for some sort of international core for phonological intelligibility'（Jenkins 2000: p.95）と述べて、母語としての英語あるいは第２言語としての英語の様々な発音から中立した、かつどの英語話者にも理解しやすい発音型を模索する研究をしている。

英語が多様化している現代では、英語でのコミュニケーションに於ける理解度が問題化してきている。国際的なコミュニケーションでの英語発音に関して研究が進められなければならない。しかし Jenkins は次のように現状を分析している。

> Meanwhile, the majority of EFL teacher training and education courses, both preservice and inservice, persist with phonology syllabuses that assume a 'native-speaker' interlocutor. They therefore involve elements that are unnecessary, unrealistic, and, at worst, harmful for preparing teachers to equip their learners with pronunciation skills appropriate to an international use of English.（Jenkins 2000: p.1）

Abercrombie が50年以上前に指摘していた「ある程度の理解度が達成されている発音」の研究が進んでいなかったのである。Jenkins はそして "a set of 'nuclear norms' for all L2 speakers of English" の確立をすることで解決しようとしている。

おわりに

ロンドン大学 University College（UCL）は近代音声学の実質的な発祥の地と言えると考えられるが、その中心は Daniel Jones であった。音声学の発展のはじめは英語教育の改革に源があったと言われるが、それはまさに Daniel Jones が語学教育のために音声学が中心となるべきだと言う考え方が基になっていると言える。その特徴は音声重視であり、それまでの翻訳中心の語学教育に新しい息吹を与えるものであった。これはすなわち、20世紀の初めから語学教育は音声中心と言われていたということである。そして21世紀の現代も同じことが言われている。

また同じように、David Abercrombie の考え方や指摘は、現代の英語教育への指針にもなる位の説得力を持っていると言えるだろう。20世紀に影響力を持った「語学教育の実践者としての音声学者」に、改めてその見識の深さを見出すことが出来る。

現在の日本の英語教育に関して示唆となりうることとしては、一つには era-training の実際を観察して、教室現場での導入方法を構築することではないだろうか。

またもう一点は、「国際語としての英語（EIL: English as an International Language)」を教えるという考え方を一般的なものとなるように働きかけ、その環境の中で発音指導のあり方を、日本でも研究すべきであると思われる。

参考文献

Abercrombie, D. 1956. 'Teaching Pronunciation' in D. Abercrombie 1963: *Problems and Principles in Language Study*. London: Longman Group Limited.

Abercrombie, D. 1983. "Daniel Jones's teaching", *Work in Progress 16*, 1-8. Edinburgh: Department of Linguistics, University of Edinburgh.

Collins, B.—I. M. Mees, 1999. *The Real Professor Higgins : the life and career of Daniel Jones*. Berlin ; New York: Mouton de Gruyter.

Jenkins, J. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.

Jones, D. 1922. *An Outline of English Phonetics*. Leipzig; Berlin: Verlag und Druck von B. G. Trubner.

Jones, D. 1956. *The Pronunciation of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jones, D. 1967. *English Pronouncing Dictionary*. London: J. M. Dent & Sons Ltd.

Palmer, H. E. 1930. *The Principles of Romanization*. Tokyo: Maruzen.

高井　收 2011.「パーマー（Palmer）再考（1)」.『言語センター広報』No.19. 小樽：小樽商科大学言語センター

高井　收 2012.「パーマー（Palmer）再考（2)」.『言語センター広報』No.20. 小樽：小樽商科大学言語センター